

ログ ファイル

Cisco CRS 履歴レポート システムでは、システムのアクティビティに関する情報がログ ファイルに記録されます。適切なログ ファイルを参照することで、次のような状況で発生するエラーの原因と解決策を特定できます。

- レポートを生成、表示、印刷、またはエクスポートしている
 - スケジューラによって、スケジュールされているレポートが実行されている
- これらのトピックについては、次の項で説明します。
- [ログ ファイルの概要 \(P.6-2\)](#)
 - [クライアントシステムのログ ファイル \(P.6-3\)](#)
 - [サーバ ログ ファイル \(P.6-7\)](#)

ログ ファイルの概要

Cisco CRS 履歴レポートのシステム ログ ファイルには、クライアント システムに存在するものと、Cisco CRS サーバに存在するものがあります。また、スタンバイ サーバが配置されている場合は、一部のログ ファイルがこのサーバ上に生成されることもあります。次の表は、このようなログ ファイルに関する一般情報を示しています。

ログ ファイル	内容	システムの場所	参照先
履歴レポート クライアント ログ ファイル	レポートの生成、表示、印刷、およびエクスポートに関する情報	クライアント システム	P.6-3 の「履歴レポート クライアント ログ ファイル」を参照してください。
スケジューラ ログ ファイル	スケジューラのアクティビティに関する情報	クライアント システム	P.6-4 の「スケジューラ ログ ファイル」を参照してください。
データベース ログ ファイル	Cisco CRS データベースからの情報取得に関する情報	Cisco CRS サーバ または スタンバイ サーバ	P.6-7 の「データベース ログ ファイル」を参照してください。
Servlet ログ ファイル	Cisco CRS 履歴レポート システムにログインしているか、またはログインを試行するユーザに関する情報	Cisco CRS サーバ	P.6-10 の「servlet ログ ファイル」を参照してください。

関連項目

- [クライアントシステムのログ ファイル \(P.6-3\)](#)
- [サーバログ ファイル \(P.6-7\)](#)

クライアントシステムのログファイル

Cisco CRS 履歴レポート クライアントでは、一連の履歴レポート クライアント ログファイルと2つのスケジューラ ログファイルが保持されます。これらのログファイルは、Cisco CRS 履歴レポート クライアント システムにあります。ログファイルは次のとおりです。

- *System-name@session-no_CiscoAppReportsN.log* : レポートの生成、表示、印刷、およびエクスポートに関する情報が含まれます。
- *CiscoSch.log* : スケジューラの印刷およびエクスポート以外のアクティビティに関する情報が含まれます。
- *CiscoSchPrintExport.log* : スケジューラの印刷およびエクスポートのアクティビティに関する情報が含まれます。

関連項目

- [履歴レポート クライアント ログファイル \(P.6-3\)](#)
- [スケジューラ ログファイル \(P.6-4\)](#)
- [クライアントシステムのログファイルを開く \(P.6-5\)](#)
- [クライアントシステムのログファイルの解釈 \(P.6-6\)](#)

履歴レポート クライアント ログファイル

履歴レポート クライアント ログファイルの名前は、*System-name@session-no_CiscoAppReportsN.log* です。このファイルは Cisco CRS Historical Reports\logs ディレクトリに格納されています。このディレクトリは、Cisco CRS 履歴レポート クライアント システムのインストール ディレクトリ下にあります (デフォルトでは、システムは Program Files ディレクトリにインストールされます)。

Cisco CRS 履歴レポート クライアントがターミナル サービスのセッションで実行されていない場合、*System-name* は、クライアントがインストールされているシステムの名前になり、*@session-no* は含まれません。Cisco CRS 履歴レポート クライアントがターミナル サービスのセッションで実行されている場合、*System-name* は、ターミナル サービスの起動元のシステム名になり、*@session-no* は、ターミナル サービスのセッションでシステムに割り当てられたセッション番号になります。

レポートの生成、表示、印刷、およびエクスポートに関する情報が、現在の履歴レポート ログ ファイルに書き込まれます。最初の履歴レポート クライアント ログ ファイルが作成されるときに、ファイル名の N が 0 に置き換えられます。このファイルのサイズが `hrcConfig.ini` 設定ファイルで指定されているサイズに達すると、新しい履歴レポート クライアント ログ ファイルが作成されます。新しい履歴レポート クライアント ログ ファイル名の N は 1 ずつ増加していきます。この処理は、`hrcConfig.ini` 設定ファイルで指定された数のログ ファイルが作成されるまで続きます。その後は、既存の履歴レポート クライアント ログ ファイルのうち、最も古いログ ファイルから順に上書きされます。

関連項目

- [hrcConfig.ini 設定ファイル \(P.2-17\)](#)
- [クライアントシステムのログ ファイルを開く \(P.6-5\)](#)
- [クライアントシステムのログ ファイルの解釈 \(P.6-6\)](#)

スケジューラ ログ ファイル

Cisco CRS 履歴レポート スケジューラでは、次の 2 つのスケジューラ ログ ファイルが保持されます。

- `CiscoSch.log` : スケジューラの印刷およびエクスポートを除くすべてのアクティビティに関する情報が保持されます。
- `CiscoSchPrintExport.log` : スケジューラによって実行される印刷およびエクスポートに関する情報が保持されます。

スケジューラ ログ ファイルは `Cisco CRS Historical Reports\Scheduler` ディレクトリに格納されています。このディレクトリは、Cisco CRS 履歴レポート システムのインストール ディレクトリ下にあります (デフォルトでは、システムは `Program Files` ディレクトリにインストールされます)。

各スケジューラ ログ ファイルの最大サイズは 4MB です。このサイズに達したスケジューラ ログ ファイルは、バックアップ ファイルにコピーされます。バックアップ ファイルの名前は、元のファイルと同じベース名に `.bak` 拡張子を付けたものになります。このバックアップ ファイルは、スケジューラ ログ ファイルごとに 1 つ保持されます。スケジューラ ログ ファイルのサイズが 4MB に達するたびに、その情報が既存のバックアップ ファイルに移動され、既存のバックアップ ファイル内の情報が上書きされます。

関連項目

- ・ クライアントシステムのログファイルを開く (P.6-5)
- ・ クライアントシステムのログファイルの解釈 (P.6-6)

クライアントシステムのログファイルを開く

Cisco CRS 履歴レポート ログファイルは、ログファイルが格納されているクライアントシステムで開きます。

ログファイルは、Cisco CRS 履歴レポートのメイン ウィンドウから開くか、テキスト エディタで開くことができます。また、スケジューラからスケジューラ ログファイルを開くこともできます。

Cisco CRS 履歴レポートのメイン ウィンドウまたはスケジューラからログファイルを開くと、ログ情報がメモ帳のウィンドウに表示されます。メモ帳のツールを使用すると、このウィンドウ内の情報をスクロールする、ファイルを印刷する、またはファイルを別の名前で保存することができます。メモ帳のウィンドウを終了するには、メモ帳の **[閉じる]** ボタンをクリックします。

その他のテキスト エディタでログファイルを開くには、エディタを起動してファイルを開きます。エディタのツールを使用すると、このウィンドウ内の情報をスクロールする、ファイルを印刷する、またはファイルを別の名前で保存することができます。

Cisco CRS 履歴レポートのメイン ウィンドウからログファイルを開くには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 [ヘルプ] > [アプリケーションログ] の順にクリックします。

ステップ 2 必要に応じて、開こうとするログファイルを含むディレクトリに移動し、目的のファイル名をダブルクリックします。

ファイルがメモ帳のウィンドウに表示されます。

■ クライアントシステムのログファイル

スケジューラからスケジューラ ログ ファイルを開くには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 Windows タスクバーのステータス領域に表示される [スケジューラ] アイコンを右クリックします。

スケジューラのポップアップ メニューが表示されます。

ステップ 2 [CiscoSch.log の表示] または [CiscoPrintExport.log の表示] を選択します。

選択したファイルがメモ帳のウィンドウに表示されます。

クライアントシステムのログ ファイルの解釈

Cisco CRS クライアントシステムの各ログ ファイルには、一連のエントリが含まれています。エントリが表すのは、ファイルに保持されている情報の対象となるシステムの部分で発生する各アクティビティです。各エントリには、アクティビティの発生日時と説明が含まれます。この情報は発生順に整列され、最新のアクティビティがファイルの末尾に表示されます。情報の各行には連番が付けられます。Cisco CRS 履歴レポートクライアントが起動されるたびに、1 という番号が付けられた新しい行が作成されます。

ログ ファイルの詳細レベルは、設定ファイルで指定された値によって異なります。履歴レポートクライアント ログ ファイルのエントリの詳細レベルは、hrcConfig.ini 設定ファイルで指定された LogLevel 値によって異なります。スケジューラ ログ ファイルのエントリの詳細レベルは、sch.ini 設定ファイルで指定された LogLevel 値によって異なります。

問題が発生した場合は、ログ ファイルに含まれている情報を確認することで、問題を特定できます。Cisco CRS 履歴レポートクライアントでエラーや問題が発生した場合は、適切なログ ファイルを開き、エラーの発生時に行われていたアクティビティを表すエントリを特定します。

関連項目

- [hrcConfig.ini 設定ファイル \(P.2-17\)](#)
- [sch.ini 設定ファイル \(P.2-20\)](#)

サーバログファイル

Cisco CRS システムには、次のログファイルが含まれています。

- データベース ログファイル: Cisco CRS データベースからの情報取得に関する情報が含まれます。必要に応じてこのファイルを作成し、わかりやすい名前を付けます。
- Jvm.stdout : Cisco CRS 履歴レポート クライアントにログインしているか、またはログインを試行するすべてのユーザに関する情報が含まれます。

関連項目

- [データベース ログファイル \(P.6-7\)](#)
- [servlet ログファイル \(P.6-10\)](#)

データベース ログファイル

データベース ログファイルは、Cisco CRS 履歴レポートクライアントの履歴データ取得先となるサーバにあります。このファイルには、Cisco CRS データベースからの情報取得に関する情報が記録されます。サーバを最も効率の良い状態で実行するために、デフォルトではデータベース ログは無効になっています。履歴レポートを生成するときに Cisco CRS データベースに関するエラー メッセージが表示される場合は、データベース ログを有効にすることで、トラブルシューティングに使用する情報を取得できます。その後、このログ ファイルを Cisco Technical Assistance Center に送ると、問題解決の支援を受けることができます。

データベース ログを有効にして、ログ ファイル内の情報を取得するには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 Cisco CRS 履歴レポート クライアントの履歴データ取得先となるサーバで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] の順に選択します。

[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 2 [名前] フィールドに **cmd** と入力し、[OK] をクリックします。

コマンド ウィンドウが表示されます。

ステップ 3 コマンドプロンプトに **cd program files\wfavvid** と入力し、**Enter** キーを押します

CRS システムが別のディレクトリにインストールされている場合は、**program files** の部分をそのディレクトリ名で置き換えます。

ステップ 4 次のコマンドを入力して、データベース ログングを開始します。

```
setsqlogging dbusername dbpassword on
```

dbusername の部分を Cisco CRS データベースのログイン名で、*dbpassword* の部分をデータベースのログインパスワードでそれぞれ置き換えます。

コマンド ウィンドウを終了するには、**exit** と入力します。データベース ログは引き続き実行されます。

ステップ 5 Cisco CRS 履歴レポート クライアントで、問題の原因となったレポートをもう一度生成します。

ステップ 6 [ステップ 1](#)、[ステップ 2](#)、および[ステップ 3](#) を繰り返します。

ステップ7 コマンドプロンプトに、次のコマンドを入力します。

```
getlogging dbusername dbpassword >> filename
```

dbusername の部分を Cisco CRS データベースのログイン名で、*dbpassword* の部分をデータベースのログインパスワードで、*filename* の部分をデータベース ログ情報を保存するファイルの名前でそれぞれ置き換えます。

ステップ8 次のコマンドを入力して、データベース ログを停止します。

```
setsqllogging dbusername dbpassword off
```

dbusername の部分を Cisco CRS データベースのログイン名で、*dbpassword* の部分をデータベースのログインパスワードでそれぞれ置き換えます。

ステップ9 コマンドウィンドウを終了していない場合は、コマンドプロンプトに **exit** と入力します。

ステップ7で指定した名前のファイルが、データベース ログファイルになります。このファイルを Cisco Technical Assistance Center に送ると、問題解決の支援を受けることができます。

servlet ログ ファイル

servlet ログ ファイルの `jvm.stdout` は、Cisco CRS サーバの `wfavvid\tomcat` ディレクトリにあります。このディレクトリは、Cisco CRS システムのインストールディレクトリ下にあります（デフォルトでは、システムは `Program Files` ディレクトリにインストールされます）。

このファイルには、`histRepClientsServlet` という servlet など、Cisco CRS サーバで実行されている各 servlet からの情報が記録されます。この servlet からは、Cisco CRS 履歴レポート システムにログインを試行するすべてのユーザに関する次の情報が提供されます。

- ログインを試行しているクライアント コンピュータの IP アドレス
- ログインが試行された日時
- ログイン試行の成功または失敗

`jvm.stdout` ログ ファイルは、ログ ファイルが格納されている Cisco CRS サーバで開きます。このファイルをメモ帳のウィンドウで開くには、ファイルを含むディレクトリに移動し、ファイル名をダブルクリックします。その他のテキストエディタでこのファイルを開くには、エディタを起動してファイルを開きます。エディタのツールを使用すると、このウィンドウ内の情報をスクロールする、ファイルを印刷する、またはファイルを別の名前で保存することができます。

`jvm.stdout` ファイルにはサイズ制限がありません。新しい情報が生成されると、既存の `jfm.stdout` ファイルに情報が追加されます。Cisco CRS 履歴レポート システムへのログインに関する情報を探すには、このファイルを開いて `histRepClientsServlet` を検索します。